

おわりに

私の前著『南光町奮戦記』の発行日は、1994年11月15日であった。当時、共産党員町長は全国に一人しかいなく、しかも、4期目の激戦を勝ち抜いたということで、全国的にも注目されていたときであった。現職の共産党員町長が書いた本ということもあって、多くの方々が関心を寄せてくださった。

そして、当時の日本共産党の宮本議長が、1995年元旦の赤旗新聞の紙上対談で、「プレゼントしたい1冊の本」として、『南光町奮戦記』を紹介された。そのおかげで、全国の共産党員や赤旗読者からの注文が殺到して、初版はすぐ売り切れ、相次ぐ増刷となった。なかには、ぜひ多くの方々に読んでもらえるように普及しようと、がんばっていただいた党組織もあった。兵庫県の共産党組織でも、そうした話し合いが行なわれていた。

しかし、その矢先、1月17日に、突然、阪神・淡路大震災が発生した。それからは、すべてが、地震の救援活動に集中することになった。南光町でも、連日、阪神地方への救援活動に集中した。救援物資を毎日、班を編成して送り届けるとともに、職員も泊り込みで、被災地の応援に入った。また、住宅や学校などへの被災者の受け入れにも取り組んだ。

阪神・淡路大震災では、6433人の尊い命が失われた。そして、何もかもが吹き飛ばされた感じであった。

あれから10年、都市基盤は復活したが、被災者の生活はいっそう大変である。

政治の基本は、一人ひとりが人間として大切にされることである。財産がある人、自力でやっていける人に対しては、行政的支援は必要でない。そうでない人の誰もが人間的に暮らせるように努めることが、政治の責任である。

その意味では、いまの日本の国と地方の政治はまだまだである。

このたび、『南光町奮戦記』から10年を経て、続編を発行させていただいたが、さまざまな行政課題に悩みながら取り組んできた約4半世紀の私の思いをつづらせていただいたものである。

何がおきるかわからない状況の中で、いかに、住民の命と暮らしを守っていくか、なかなかたいへんなことであるが、常に、社会的弱者に目を向けた対応策をとっていくことを基本にすえなければならぬと思う。

私は、最後まで、この政治姿勢を貫きたいと思っている。

この本を発行するにあたり、あけび書房代表の久保則之さんには、前著に引き続き大変お世話になり、ご苦勞をおかけした。久保さんのご支援なしには、私の本は刊行できなかった。二度にわたってこうした機会を与えていただいたことに、心からお礼申し上げて、あとがきとしたい。

2005年2月20日 山田 兼三